

---

# バカとテストとラッキー スター

アスタリスク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストとラッキー スター

### 【NNコード】

N9522W

### 【作者名】

アスターリスク

### 【あらすじ】

バカテストとらき すたのクロスオーバー！

柊かがみを除いた泉こなたと柊つかさと高良みゆきはある諸事象でFクラス入りする。そこで出合つた吉井明久たちとほのぼの(?)とした物語が始まる！

こなた「さあ、始まるぞますよ？」

みゆき「いくでがんす？」

つかさ「ふんがー！」

かがみ「まともに始めなさこよー（ 、 、 ）」

## キャラ紹介（召喚獣の設定込み）になた・瑞希追加（前書き）

キャラクターの設定です。話がすすむにつれ、キャラや設定が追加されていきます。

## キャラ紹介（召喚獣の設定込み）こなた・瑞希追加

文月学園（ふみづきがくえん）

本作の舞台となる学園。革新的な学力低下対策として、「試験召喚システム」を実験導入している。また、進学校であると同時にそのシステムの実験場でもある。

スポンサーが多くついており、そのため学費が極めて安い。だが、そのせいで生徒を大量に取られたせいで近隣の高校からは目の敵状態。

試験校でもあるため、世論に運営が左右されやすいという問題点がある。

吉井明久（よしいあきひさ）

本作主人公。2年Fクラス所属。胸ランク／野郎のなんざ知りたくなえ。

学園創設以来初の「観察処分者」。その頭の酷さはバカにするどころか同情すら覚えてしまうほど。己の頭の酷さは自覚してはいる。嘘すらまともにつけないために、雄一など、小ズルイ事などに頭の回る人間には利用されがち。

それゆえに極度までバカにされると落ち込む。が、つかさのおかげで少しは前向きになつた。

鉄人西村から逃げるために、学園の様々な場所の地形などを把握している。

召喚獣ステータス

ユニットクラス Bad student

装備 頭 なし

足	なし
武器	木刀（櫻の木製）
腕輪	???

### 柊つかさー（ひいらぎー）

本作ヒロインのひとり。2年Fクラス所属。胸ランクノ2  
 柊家の四女。優しく、思いやりがあるが、その反面弱気なところ  
 がある。姉であるかがみとの能力の差に小さい頃はかなりのコンプ  
 レックスを抱いていた。が、現在はそれも立ち直りつつある。  
 かがみからFクラス男子（明久など）に関わるなど言っていた  
 が、ある一件からそれは間違いだと思うようになる。

### 召喚獣ステータス

ユニットクラス	Gentle cook
装備	ライトグリーン
頭	二角巾
体	チエックのエプロン（赤・白）
足	文月学園の上履き
武器	鍋蓋・フライパン
腕輪	???

### 高良みゆきー（たからー）

本作のヒロインの一人。2年Fクラス所属。胸ランクノ5  
 主要メンバーのなかで、唯一の電車通学をしている。だが、ソレ  
 が原因でFクラス入りになつた。

つかさ同様優しく、思いやりがある。心の広さはかなりのもので、  
 一部の生徒から「聖人君子」とまで言われる。

成績は優秀であり、学園のトップクラス。また、ソレに加え雑学

なども達者である。

### 召喚獣ステータス

ユニットクラス Intellectual animal magici  
an

装備	頭	魔術師の三角帽子
	体	魔術師のローブ
足		魔力溜めの靴
武器	聖者の杖	
腕輪	???	

### 泉こなたー（いずみこ）

本作の主要人物の一人。2年Fクラス所属。胸ランク／1  
漫画やゲームなど、様々なそういうものが好きないわゆるオタ  
ク。様々なものをゲームやアニメに例えることがある。

土曜日に振り分け試験があつたため、それを忘れて積みゲー崩し  
をしていたためにFクラスになった。ちなみに、文月学園に入学し  
たのは試験召喚戦争に興味があつたため。

ぼんやりしているようで、実は結構鋭い。両利きである。  
つかさの中に芽生えたとある感情の萌芽の存在にも実は既に気が  
ついている。

### 召喚獣ステータス

ユニットクラス Capricious fox

装備	頭	なし
	体	赤銅の鎧
足		赤い足甲
武器	レーヴアテイン	
腕輪	???	

姫路瑞希（ひめじみずき）

本作の主要人物の一人。2年Fクラス所属。胸ランク／5  
原作のメインヒロイン。

努力家であり、学年トップクラスの成績はその賜物。おしとやか  
で育ちもいい。（色々な意味で）

作者の書くバカテス作品の中では唯一特別扱いな設定は無く、立  
ち位置やなども原作そのまま。Fクラス入りは試験中に体調不良で  
の途中退席によるもの。

召喚獣ステータス

ユニットクラス Allrounder rabbit

装備 頭 ハートの髪飾り

体 白銀の鎧

足 白銀の足甲

武器 白銀の大剣

腕輪 熱線

## 突っ走るバカ（前書き）

さあ、始まり始まりー！

## 突つ走るバカ

### 文月学園。

それは、今現在世界で最も注目を集めている進学校である。注目を集めている理由としては、その学園のみにある特殊なシステム、『試験召喚システム』という存在である。科学と幾ばくかの偶然、そしてオカルトの要素が混ざり合い誕生したこのシステムは、学業低下が嘆かれる昨今の日本の教育社会に新風を巻き起こすものとなるかもしれない。

かもしれない、というのはまだそのシステムが発展途上にあるからである。いわば、文月学園にある試験召喚システムはプロトタイプと呼ばれる代物なのだ。そして、プロトタイプである以上、未解決の問題やまだ見ぬ、現れぬトラブルなどの心配がある。だから、そういうトラブルなどがあるかもしれない発展途上のこのシステムを試験的に採用し、そういうトラブルの除去や問題のクリアーのために、事实上の実験校としてその試験召喚システムを試験運用しているのが文月学園なのである。

そして、注目をされている以上、その注目に応えなければならぬ。そのために、文月学園は普通の高等学校などには無い取り組みを行っている。その取り組みの一つが学年末試験の次に行われるクラス振り分け試験だ。この試験の結果によって次の学年の所属クラスが決まる。しかし、決まるのは何もクラスだけではない。他に決まるのは、自身が所属するクラスの“設備”である。上位のクラスであればより豪華な設備を、下位のクラスであれば眼を覆いたくな るような貧相な設備が与えられる。

傍から見れば差別にしか見えないこの設備の差。この差が生徒のハンギリー精神を奮い立たせ、その果てに他の高等学校では決して真似できない取り組みが行われる。それは

試験召喚戦争である。

Chapter 1 バカと不安と萌えをその手に、戦う者たち

## 第一話 突っ走るバカ

春。

あるによつては、新たな学年や新しい仲間、もしくは新生活が始まる季節。

あるによつては、これから、もしくは既に猛威を振るつている花粉と戦う季節。

あるによつては、恋が始まるカウントダウンが始まる季節。

そんな春の季節の中、彼女、泉こなた、柊つかさ、柊かがみ、高良みゆきは上記の三つで言えば一番目に該当する。彼女達は今年で文月学園の一・二年生となる。そんな彼女達は現在、今年で二度目となる桜並木の坂道を歩いていた。そして、何気に急なその坂道を登りきつた彼女達四人組はようやく文月学園の校門へと辿り着く。

「遅いぞお前達。もうすぐ予鈴がなるぞ？」

そんな彼女達にそう告げるのは、筋骨隆々の、まるで鋼鉄のような肉体を持った男性だった。鍛えに鍛えた有り余るその筋肉は、着ている黒のスーツをからでも窺い知れる。男の名は西村宗一郎。その体つきや趣味であるトライアスロンから『鉄人』と影で言われ、生活指導の鬼として生徒から恐れられている。

「おはようございます。3年A組鉄人先生」

「……泉。いきなり新学期早々補習室に行くか？」「ええ！ それは勘弁です！」

そんな鉄二……西村教諭とそんなやり取りをするのは、腰はおろか膝まで伸びた超ロングヘヤーの青い髪にアホ毛、左目(泣き黒子)に小学生のような身長と体躯をした泉こなただ。一応彼女の名前(?)のために言つておくが、彼女はちゃんと年齢どおりの高校一年生である。別にどこかの見た目は子供、頭脳は大人な名探偵でもなければ、どこかのマセガキの言葉を悪い意味で体現している金髪ツインテの飛び級生でもない。

「う、こなちゃん。ちやんと挨拶しないとダメだよ！」

そう言つのはライトパープルのボブカットの髪に黄色のリボンを力ちゅーしゃ風に付けたどこか気の弱そうな感じのある柊つかさだ。彼女を嗜めてはいるものの、オドオドしているためにどこか頼りなさがある。

「全くアンタは……。挨拶ぐらいちゃんとやりなさいよね」

そうキツめに言つのはつかさと同じライトパープルの髪をツインテールにしている柊かがみだ。苗字を見れば分かると思うが、つかさとは姉妹関係にある。一応かがみの方が姉だ。

「まあ、かがみさん。泉さんも悪気があつて言つたわけでは無いです」

そこなたを擁護するのは腰まであるライトピンクに髪に丸眼鏡、そして制服越しでも分かる豊満な胸を持つた高良みゆきだ。その知性を感じさせる雰囲気と大体のことをプラス思考に考える優しさか

ら、かがみを始めとする一部の生徒からは『聖人君子』と呼ばれている。

「まつたく、お前というヤツは……。まあいい。ホレ、受け取れ」

そう言つて西村教諭は脇に抱えている箱から四人の名前が書いてある封筒を取り出しそれぞれに渡す。渡された四人はそれぞれの封筒をマジマジと見て、封を開けようと……

「遅いぞ、吉井！」

「うげ、鉄人！？」

したところで、西村教諭と吉井と呼ばれた生徒の対話でその手が止まつた。

「誰が鉄人か、西村先生と呼ばんか」

「あはは、すみません」

「まつたく、それはそつと受け取れ」

そう言つて西村教諭は四人と同じよつに彼、吉井明久に封筒を渡した。

「それにしても、なんでもまたこんな面倒なやり方でクラス分けを発表するんです？ 普通に大きな紙を貼り付けて発表すればいいのに」「普通はそうするんだがな。ここは世間から注目を集めている学園だ。少しでも他の高校とは違うことをしたいんだそうだ」

「そんなもんですかね……」

「ところで吉井、実はな。俺は去年の一年間お前を見てきて、もしかしたら吉井はバカなんじやないか？ と、疑いを持ってきたんだ」

そんな西村教諭の言葉に、明久はアハハッと笑つて返す。

「それは大きな間違いですね。その内『節穴』なんてあだ名がついてやりますよ？」

「まったくだ。そう呼ばれても言い返せん。喜べ吉井、お前への疑いは無くなつた」

その言葉とほぼ同時に、明久は封筒からクラスの書かれた用紙を取り出し、見た。

『吉井明久 Fクラス』

「吉井。お前は疑いの無いバカだ」

明久の肩にポンッと手を置き、西村教諭はそう告げたのだった。そんなやり取りを見ていた四人は、途端に「〇のクラスがどこなのが気になり、封筒から用紙を取り出した。

「皆はどうのクラス？ みゆきは△クラスでしょ？」

かがみは自身の『柊かがみ Aクラス』と書かれた用紙を三人に見せながら聞いてくる。しかし、そのほとんどが彼女にとつて予想外の結果だつた。

「その、すみませんかがみさん。〇期待に沿えたことができなくて」

そう言つてみゆきは自身の紙をかがみに見せる。そこには

『高良みゆき Fクラス』

とあつた。

「ちよ、なんで…? なんでみゆきが『Fクラスの…? みゆきつて私より成績良い筈でしょ！?」

「あの、じつは試験当日。電車が事故で遅れてしまいまして。ようやく来た電車に乘つて、一応こちらには来たのですが、遅刻が理由で試験を受けられなくて」

「なによそれ！?」

みゆきが告げた事実に、かがみは驚くと同時にちよつとした苛立ちがあつた。その苛立ちは遅刻ぐらいで、しかも寝坊とかではなく事故といつちやんとした理由があるとこいつの『F試験を受けさせてくれなかつた学園に対してである。だが、かがみの驚きはこれで終わらなかつた。

「あれ？ みゆきさんも『Fクラスなの？』

そうこなたが言つてきたからだ。やつれ、みゆきさん“ も” と。

「ちよつと待ちなさいよ。まさかこなたも『Fクラスなの…?』

「うそ。ホラ」

やう言つてこなたは用紙をかがみのみならず、みゆきとつかせにも見えるように見せる。そこには確かに『泉こなた Fクラス』とあつた。

「ちよ、何でアンタまで…? アンタつて一夜漬けとかで結構な点

数取れるんじやないの…?」

「いやー、実は土曜日に試験があるので忘れてて積みゲー崩ししてた

（ = = - - - ）

「おいやつと待て！ アンタのは完全な自業自得じゃないか！」

意外すぎる事実にかがみは最早呆れ、怒鳴るしかない。そして、かがみは更にいやな予感がしたのだ。

「あ、あのさつかさ？ アンタもFクラスなんてこと無いわよね？」

恐る恐るといった感じで妹であるつかさを見る。そして当のつかさは氣まずそうな顔をして

「えっと、『めんねお姉ちゃん』

そう言つて『終つかさ Fクラス』と書かれた紙を見せた。

「アンタもかい！」

「えへへ、実は試験のときにな？ 問題の答えが一問ずつずれてるのに気がついて」

「わかつたもういい。皆まで言つな」

大方、ずれてた答えを直してゐる内に時間切れになつたと言つところだろう、とががみは中りをつけめ。回答のずれに加え、つかさ自身成績はあまり良くないこともありこいつなつたと言つたところか、と。

「それはそうとお前達。もう予鈴が鳴つてゐぞ？ 早く教室に行け」

「え？ ああ、はい」

言われてみると、既に予鈴がなつてゐる。早く行かないと新学期早々遅刻してしまう。そう思つた四人は、慌てて昇降口へと向かつた。

去年はほとんど来た事が無い三階へ足を踏み入れた四人の前に、一人の男子生徒がいた。その男子生徒は明らかに他とは違う大きな教室の中を覗きこんでいる。

『うわあ、すごい。リクライニングシートにシステムデスクに……あ、ノートパソコンに個人冷蔵庫まである!』

そんなことを誰にと無く呟いているのは、先ほど西村教諭からバ力認定を喰らった明久である。『うやうや三階にある』の教室に興味を持つて覗いてるといったところだろう。

こなたとつかさとみゆきはそんな彼の行動にちょっとびりとだが驚いている。そんな中、かがみだけが唯一三人とは違う視線を向けている。

「…………」

その視線には、明らかに嫌悪が籠っていた。

『おつと、そろそろ行かないと』

そう思い出したように明久は覗くのをやめ、自身の教室へと足を向けた。そんな彼を見て、四人もそれぞれの教室へと足を向ける。そして、Aクラスの扉を手に掛けた所で、かがみは三人、特につかさに声を掛ける。

「それはそうと。彼、吉井つてヤツに気をつけなさいよ」

「？」 どうい「う」と、お姉ちゃん  
「彼は観察処分者なのよ。だから、同じクラスのはどうしようも  
ないとしても、関わつたりしたらダメよ。いい？」  
「え……？」 う、うん

ピシッと指を立て、残った片手を腰に当ててかがみはつかさにそ  
う告げ終え、今度こそ扉を開けて『すみません。遅れました』と言  
つて教室へと入つていった。

そして教室へ向かい、途中、つかれぽけになたとみやがて小声で声を掛けた。

(ねえ、じなむちやん、ゆせむちやん。観察処分者つてなあに?)

る肩書きみたいなものだよ）

するのも分かります)

（じゃあ、あの吉井つて人、不良なの？）

（まあ、そのことは教室に着いたら詳しく説明しますね？）  
（うん。おねがいってほによ～～～！！？）

と、突然つかさは前のめりに『ビターンシ-』と倒れる。どうやら新校舎と旧校舎を繋ぐ渡り廊下の校舎と渡り廊下を繋ぐ部分にある僅かな凹凸につま先を引っ掛けたようである。

「つ、つかさ！？」

「大丈夫ですかつかさん！」

「うう、痛いよぅ……」

流石に高校生ともなると転んだぐらいで泣いたりしないが、それでも痛いことに変わりは無い。更に言えば、膝をほんの少し擦り剥いたのか膝から血が僅かながら出ていた。

「つかさ、保健室に行く？」

「そうですね。とりあえずまずは教室に行って荷物を置いて、先生がいるようでしたら事情を説明して保健室に「あの、大丈夫？」え……？」

突然掛けられた声方向に視線を向けると、そこには明久の姿があった。

「えと、あの……」

突然のことでのつかさは何を言つていいのか分からなくなる。いきなり声を掛けられたこともそうだが、掛けてきた相手が先ほどかがみが言つていた明久だったこともある。

「あ、血が出てるね？ ちょっと待つて」

当の明久はつかさの膝の血を見て持つっていた通学バッグを下ろしチャックを開ける。

「えーと、これじゃないこれじゃない。これでもない、あれ？」  
確かここ……」

田当てのものがなかなか見つからぬのか、まるで整理されてないドリえもんのポケットの秘密道具が如く田当てのものではない様々なものが出てくる。漫画だったり、PSPだったりDSだったりDVDだったりトランプだったりUNOのだったり作りかけのガンプラ（144分の1デルタプラス）だったりそれに使うニッパーやデザインナイフだったりガンプラマーカーだったりサンンドペーパー（紙やすりみたいな物）だったりダーツに使う的やダーツ本体だったり水の入ったペットボトルだったり塩や砂糖の入ったビンだったりエロボ……ゲフングエフン！ 保健体育の参考書（比喩表現）だったりなど、本当にさまざまなものが出でてくる。というかお前は何しに学校に来てるんだと言いたくなる。

「えーと……あ、あつたあつた

そう言つて明久は鞄の底の底からそれを、絆創膏を取り出した。

「えつと、ちょっと「めんね？」

「え？ あ、うん」

そう言つて明久はかがんでつかさの膝に絆創膏（何故か犬柄）を一枚ペタリと張つた。

「これでよしつと。他に血が出でるとこある？」

「ううん。大丈夫」

「そつか。この渡り廊下、他の階と違つて段差がほんの少し高いから気をつけたほうがいいよ？」

「うん、ありがと。でも、何でそんなこと知ってるの？」

なんとなく思った疑問をつかさは口にする。

「ああ、それはね。去年鉄人から逃げるために校舎中を逃げ回つたからね。逃げ切るために校舎内の特長とか覚えてるんだよ。例えば、この窓の何だけど、開けるとすぐ近くに雨どいの筒があつてね。そこから下の階に滑り降りることができるんだよ」

「わあ、すごい！」

明久の言つとおりに窓を開けると、確かにそこには雨どいの筒があつた。よく見ると手の跡や誰かが滑り降りた跡がある。明久の言つていることは嘘では無さそうだ。

「ホントだー。ねえ、他にはどんなことがあるの？」

「やうだね、他には」「

こなたが持つてるオタク知識とも、みゆきの知つている勉強や雑学などの知識とは明らかに違うその知識（？）に、つかさは興味を持つた。そして、色々聞いている内に彼女は無意識に思った。

ああ、この人は悪い人じゃない。すくいい人だ。

と……。  
ちなみに。

「一体どうやつてこんなにいろんなものが入つてたんでしょう？」

不思議ですね

「あー、モンハン3『さじやん』こんな近くに同志がいたとはね」

明久の鞄の中身を見て、みゆきとこなたはそれぞれが思ったことを口にしていた。

余談ではあるが、四人が教室に行かねばならないことを思い出すのは一分ぐらい先のことである。

## 突っ走るバカ（後書き）

感想待つてます。どうぞお願いします。

## 遅刻と差別、そして美少女の二角形

「Fクラス。

それは一年生から他の高等学校と違つ特色が完全に現れ始めるこの学園において、最底辺の者たちが集まる場所である。

そしてそれは、クラスによって設備のレベルが変わるこの学園において最低の設備を使用している場所とも言える。しかし……

「あのや、みゆきさん」

「なんでしょ?」

高低凹凸コンビの片割れ、こなたは「F」が所属するクラスを見て、コンビのもう一人の片割れたるみゆきに声を掛ける。それはクラスの設備を見たからではなく

「なんていうかさ、私たちつてもしかして道間違えた?」

「いえ、それは無いと思いますが……」

「いや、だつてさこの教室

「

こなたは再び「F」の所属する教室を見る。正確には、その教室の外観。

ボロボロで、隙間風が入りそうな木製の壁。

やはりボロボロで、ヒビが入っているところをセロハンテープで補習しただけの、開閉に苦労しそうな窓。

明らかに立て付けが悪そうで、窓同様開閉に苦労しそうな木製のドア。（一応スライド式）

ドアのある「2・F」と書かれてる木製の板は「F」の部分が明らかに紙で書いたのを貼り付けただけのもので、ち

よつと強めの風が吹いたら剥がれそうである。更によく見れば、『F』の下には『E』の文字が見える。そればかりか、張つてある紙も再生紙なのか裏に何かしら書いてある。明らかに「ペーミスかいらなくなつたプリントで作った即席物である」とは目に見て取れた。

「どう見たつて廃墟じゃん

事実。こんなものを見てしまえば、十人中九人はこなたの声つとおり「ここにって廃墟?」と言いつつである。ちなみに残りの一人は「倉庫か何かですか?」である。まあ、あながちその一人の言つていることは間違いではない。一部の生徒からは、Fクラスはこう呼ばれてるのだ。

「バカを入れとく倉庫」、と……。

第一話 遅刻と差別、そして美少女の三角形

「まあ、仕方あつませんよ。これがこの学園の特徴と言えば特徴なのですから」

みゆき自身もそう言つてはいるものの、流石にこの教室の外観には驚いてるらしく、その様子が微妙ながらも顔に出ていた。

「ま、まあとりあえず入ろうよ? ひどいのは外側だけかもしねないし」

やはりこなたとみゆきと同じく教室のひどいこの外観を見て打ちひしがれていた明久は、気を取り直して言つ。確かに、ここで突つ

立っていても仕方が無いし、何も始まらない。

ちなみに、こなたもみゆきも既に明久とは何の抵抗も無く打ち解けていた。つかさがいい橋渡しになつたようである。こなたもみゆきも、つかさの人を見る目に関しては結構な信頼を寄せていたりする。

「じゃあ、私から入るね？」

四人の中で、つかさが教室のドアに手をかけて開ける。

のだが、立て付けの悪さゆえかなかなか開かない。開くことは開くのだが、ギシギシとスムーズとは言いがたい音が響き、ようやくドアが開く。

「はあ、はあ、すみません遅れまし「早く座れ。」このうじ虫野郎」  
ほよよ〜〜！〜？（。 。 ）」

突然投げかけられた言葉に、つかさはギョッとなる。だが、そんなつかさよりもギョッとした者がいた。

つかさをうじ虫呼ばわりした、教壇に立つてゐる男子生徒である。

「あ、……つと、す、すまん君！ さっきのは西にじやなく後ろにいるバカに言つたんだ！」

慌てて赤毛を逆立て男子生徒は謝罪する。が

「みゆきちゃん。いきなりうじ虫呼ばわつされたよ〜（つ、 、 ）」

その言葉をこなたがワザと自分に言われたものとして演技開始。

この瞬間、赤毛ゴリラの運命は決まった。

赤毛ゴリラが慌てて言い直そうとするが時既に遅し。明久指揮の下、既に教室にいた男子があつという間に赤毛ゴリラを取り囲む。

「ちよつと待てお前等！ 何故にあつて間もない奴の指示にそんなすばやく動けるんだ！？」

「黙れ赤ゴリラ！ 女子を泣かす奴に人権は無い！」  
「全くだ！ 口りつ娘最高！」

「女子を泣かす奴。それは、世界の敵だ！ 許されたいなら死にさ

「…」  
「だから、おまえも…」  
「…」

以下、効果音でお楽しみください。

ドガツ！ バキッ！ ドゴゴゴゴツ！ ズダンツズダンツ！ ブ  
ウイイイイイイイン……バシュウウウウンツ！！ ズババババツ！  
ドッゴン！ ドッゴン！ ボワワワワツ！ ビギビギビギツ！ デ  
イバハイイイーーン、バスタアアア————！

様々な攻撃音が響き渡り、赤毛ゴリラは一瞬の内に人語を解する赤毛のゴリラからボロ雑巾へとジョブチェンジしたのだった。

「ゲホッゲホッ！ はあ、はあ……。と、とにかく。すまなかつたな、君。今のは君の後ろにいるバカ面の野郎に言つたんだ」

そう言ってボロ雑巾はつかさに謝罪する。

「えと、うん。間違いだつたならいいよ。」

「それで雄一？」

つかさは戸惑いながらも許し、明久はそのボロ雑巾……もとい、悪友たる坂本雄二に教壇に立つていた理由を問うた。

「ああ、なんか担任の先生が未だに来なくてな。それに、俺がこの

「…………」

・えで  
しやあがーかーのぐーとの代表なの?」

卷之三

それは言い換えると雄一を説得するとのクラスを動かせるという意味になるのだが。

「それで誰一、帝頃は？」  
「ううん、おまえの？」

「このクラスは曲席だと、(三)か席順なんて決まってない」

「ハルバニフラグニ」

卷之三

それを言つたら元も子もない」とを、雄一はあつけからんと言つ

たのだつた。

「それじゃあ僕はここに座らうかなー

「じゃあ、私は一いつ

「それじゃあ私はここにするね」

ちょうど教室の窓際の隅が開いていたので、明久たちはそこを陣取つた。一番隅を明久。その右隣をつかさ、その前がこなた、その

左隣（つまり明久からは前の席）にみゆきとこつた具合だ。

黒板

みゆき こなた

明久 つかさ

図にあると上記のとおりになる。

「それにしても、吉井君って結構役得だよね？」

「え？ それってどうこいつと？」

突然のこなたの言葉に、頭に疑問符を浮かべる。

「いや～、新学期にいきなり女子三人と知り合つなんてさ。まるで吉井君つて、ギャルゲーの主人公みたいだよね？」

「ギャルゲーって……。というか泉さん女の子なのになんでそんなゲームしてるのさ……」

女子高生、年頃の女の子がギャルゲーという言葉を平然と使っていることに、明久は驚く。

「ん？ でもそういうゲームって年齢制限的なものって無かつたっけ？」

実際、ギャルゲーなどは制限年齢に差があつてもそういうたものはほぼ確實に存在する。（実際作者の持つてたヤツにも最大でC E

RO・C（15禁）がある）

「いや、そういうのはお父さんに頼んで買つてきてもううから」「（いや、なに頼んでんの！？ というか、買つてきたの！？ 泉さんのお父さん！）」

更なる事実に明久はただ驚愕するしかなかつた。

「そ、それにしてもさ。やつぱり外觀と一緒だつたね？ その、設備とか……」

そう言つてつかさは教室をぐるりと見回す。

腐つた畳。

薄つぺらな座布団。

ひびが入つて入る窓。

隙間風の入る壁。

ガタガタで、今にも壊れそうな卓袱台。

「確かにそうですね。外だけで、中は大丈夫だと思ったのですが……」

「ものの見事に外と同じだつたね？ というかいまどき床が畳つていうのが逆にすごいね（－－－）」

教室のあまりな現状に、こなた達は絶句するしかない。

「それにしても、遅いね？ 担任の先生」

明久は未だに雄一が立つてゐる教壇を見ながらふと呟く。事実、未だに担任の教師は来る気配はない。

「まさか担任の先生が遅刻だつたりしてね」

「あはは、流石にそれはないよー」

「だよね、言ってみただけだよ」

明久とつかさはそう言いあいながら笑いあつ。そこへ……

ドタドタドタツ！ ガラリツ！

「皆席につけーーーつ！ はあ、はあ、ぎりぎりセーフや」

そこへ一人のスース姿の女性が入つてくる。だが、着ているスースはどこか着崩れていたり、腰まである金髪はボサボサの寝癖だらけだつたりなど、明らかに寝坊しましたといった風体である。

「あーーー、ウチが担任の黒井やつ。皆学年も上つたんやし、いつまでも休み気分でおらんで心機一転頑張るよーにっ

そんな、教卓に前かがみになりながら息を整える彼女、黒井ななこのその言葉に対して、誰もが思った。

『『『『『せ、説得力ねえ…………』』』』

「あーーー……、それはそうとみんな個人の設備はちゃんとあるか？  
不備は無いか？」

そんなななこの言葉に、数人が手を挙げる。

「先生。座布団に綿があんまり入つてないんですけど……」

「あー、我慢しい。ちゅーかダメなら自分の家から持つてくるなり買うなりしい」

「先生。俺の卓袱台今にも崩れそう、つてか足が一本折れてるんですけど」

「H.R.終わつたら木工ボンド持つて来たるわ」

「先生。窓が割れてるんですけど」

「ピーチル袋とセロハンテープを後でやるわ」

「先生。彼女がいなんすけど」

「先生も粗手がおらん。諦めえ」

などなど様々な不備、といつより不満が出てくるが、ほとんど（といづか全部）が応急処置のレベル。新しいのを申請をするとか、業者を呼んで取替えをせるとかの回答は無かった。

「せついや先生。せつき教卓に上つて黒板を見たらチョークが粉とクズしか無かつたんですが、授業とか色々どうするんですか？」

今度は雄一が不備の点を上げる。

「あー、チョークはFクラスは……えーと、白だけ申請できるから授業までに申請しとくわ」

チョークすら無いのかといつより、白しか使えないのかといつ事実に誰もが驚愕した。

「ま、ともかく廊下のまづから白口紹介し」

そんなんの言葉に、廊下側の一一番前の生徒がスクッと立ち上がる。

「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

そつ自己紹介する生徒に対して、こなたが挙手をする。

「質問質問」

「む？ なんじゃ？」

「なんで男子の制服着てるの？」

「あ、それ私も思った」

こなたの質問に、つかさが賛同する。

「いや、ワシは男なのじゃから男子の制服であつておるのじゃ」

呆れ顔秀吉のそんな言葉に、こなたはふむ、といった顔をする。

「なるほど、男の娘か。そんな漫画みたいな人初めて見たよ」

秀吉の言葉に、こなたは一人でうんうんと納得する。ちなみに、後ろではつかさが「……男の娘？」と頭に疑問符を浮かべて呴いていたのだった。

「……土屋康太」

次に自己紹介したのは三白眼に寒色系の髪の小柄の男子だった。なぜかポケットから小型カメラがのぞいてる。

「 です。帰国子女ですけど会話は問題ありません。あ、ドイツからなので英語は苦手です。趣味は 」

そんな言葉が聞こえた瞬間。明久がビクッと震えたのをつかさは気がついた。

「……？ どうしたの？」

「え、いやその……」

明久が言い切る前に、その理由は聞こえてきた。

「吉井明久を殴る」とです はりはるー吉井

「つ、あ……。し、島田さん……」

明久は島田という名の女子に怯えたようになる。その反応を見て、つかさにこなた、みゆきは三人とも「？」となつた。

「 です。趣味は 」

そんな感じで自己紹介は続いていく。やがて……

「えーと、泉こなたです。よろしく~」

こなたの自己紹介（意外とあつせつしたものだった）が終わる。

「えと、柊つかさです。特技は、お料理です。よろしくお願ひします」

少なくともこなたよりは物事を言つてこなつかさの自己紹介。

「高良みゆきです。みなさん、今年一年宜しくお願ひしますね」

「寧なみゆきの自己紹介。そして

「えーと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って読んでくださいね？」

『 『 『 『 『 ダアア――――――――――――』 』 』 』 』

野太い野郎オンリーの声が教室に響く。

「ちょ、……吉井君」

「『めん……』」

作り笑いで誤魔化したものの、流石にこれには後悔したのだった。  
その後、ありきたりな自己紹介が進んだところで……

ガラリッ

教室のドアが開かれる。そして入ってきたのは

「あの、遅れて、すみません……」

「ん、おお。丁度いいわ。今自己紹介しとるから、姫路も自己紹介  
し」

「あ、はい。姫路瑞希です。今年一年よろしくお願ひします」

そう言って彼女、学園次席の少女である姫路瑞希はペコリと挨拶  
したのだった。

## 戦いの引き金

### 第三問 戦いの引き金

「何でここにいるんですか？」

それが彼女、姫路瑞希に掛けられた質問であつた。聞き方によつては失礼としかいえないこの質問だが、質問したくなる理由も分かる。ここはFクラス。最底辺のクラスなのだ。ぶっちゃけバカが集まるクラスといつても過言ではない。

だが、姫路瑞希はその「バカ」には入らない。なぜなら彼女の成績は優秀で、学年次席をみゆきと取り合つていてるほどなのだ。故に、そんな彼女がここにいるのは傍から見てもおかしかつた。

「えっと、その実は振り分け試験のときに熱を出してしまいました……。そして途中退席したので……」

全てのテストの点が0点扱いになり、Fクラスに配属された。要するにこういうことだつた。

試験召喚システムを始めとして、この文月学園では様々な取り組みが行われている。そして、その歴史はまだ浅く、いや、歴史と言つていいほど長くはまだ無いこともあり、どこかしらで不具合が生じる。試験召喚システムなら、召喚獣の設定や召喚フィールドなど個々人での差異が原因でどこかでトラブルがあつたりといった具合に。

そして、今回の振り分け試験の病気による途中退席に関してもそのうちの一つだ。試験中になにが、どうして、どうなつた場合どうするのか、といった具合の俗に言うマニュアルがまだ未完成なので

ある。今回の瑞希の「途中退席は全教科無得点」という事態も、その試験の試験官の独断がそのまま行使されたような感じなのである。仮にもこじは教育機関。当然何年かで他の学校に異動なんてこともある。そうなれば、当然以前の学校で得た常識を以って行動を起こす教師もなんだかんだでそれなりにいる。今回の件もそれなのだ。その試験官のその判断は前の学校で得た常識なのである。（その試験官が前にいた学校は完全なお受験学校だったそうな）さて、ともかくそんな瑞希の言葉に、教室のアチコチから色々な声が上がる。

『そりいえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに……』

『ああ、化学だろ？ アレは難しかった』

『俺は弟が事故に遭つたせいで実力を出し切れなくて……』

『だまれ、一人っ子』

『俺は前の晩、彼女がなかなか寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがと』

などといったことがあちらこちらから聞こえる。なんというか、想像以上にバカだらけである。なにせ聞こえてくるのは自分がこのクラスに配属されたことへの言い訳だらけなのだから。

「と、とにかくよろしくお願ひしますっ！」

そう言つて瑞希はぺこりと頭を下げてそそくさと空いている席に向かつた。そして空いている席、つかさの横の席に座り、「緊張しましたあ～」と言つて卓袱台に突つ伏した。

そんな彼女に、明久は膝立ちで動いて彼女の近くに行く。

「あのや、姫～「姫路」……」

声を掛けようとしたところで、別の声が被せられる。その事態に明久は一人「ガビーン」といった感じの顔をし、それを見たこなたは「ライバルフラグが立つたね」と呟いていた。

「えっと……」

「坂本だ。坂本雄二」

「あ、はい。姫路瑞希です」

そう言つて瑞希は明久の声に声を被した本人である雄二に対してペコリと頭を下げる。この辺りに、彼女の育ちの良さが見え隠れしていた。

「それはそうと、もう体のほうは大丈夫なのか？」

「あ、はい。もう大丈夫です」

「あ、そりなんだ。あのときからずっと気になつていたから良かつたよ」

「はい。おかげさまで……って、吉井君！？」

後ろを振り向き、そこにいた明久に瑞希は思わず驚く。そんな彼女の反応を見て雄二は……

「姫路。明久が不細工ですまん」

失礼なことを言つた。

「そ、そんなん。目もパツチリしてて、顔のラインも細くて綺麗だし、全然不細工なんかじゃないですよ！」

そんな瑞希の言葉に、雄二は「ふむ」と明久を見る。

「まあ確かに、見てくれは悪くないな。俺の知り合いにも、明久のことを気にしてる奴がいたはずだし」

「え！ 雄一、一体それってだ「それって誰ですかー？」 うわっ」

明久の言葉を書き消す様に瑞希の言葉が重なる。

「確か、久保……」

雄一の言葉に、瑞希は自分の記憶にある久保姓の生徒を探し始める。

「……利光だつたかな」

久保利光 性別『』

「……僕、もうお婿に行けない……」

「安心しろ明久。半分冗談だ」

「そうなんだ。よかつて、ちょっと待つて！ 半分！？ ねえ、残りの半分は！？」

ある意味あんまりな言葉に、明久はなお雄一に追いすがる。実際残りの半分が何なのか、聞いといた方がいい気がするのだ。というか、聞かないと色々な意味でやな予感を明久を明久は感じ取つていた。

「お~い、じ~らソコ。ちょい静かにしい」

そう言つてななこは教卓をドンドンと叩く。すると……

バキイツ、ガラガラガラ……。

あつという間に教卓は教卓だった。『ミスジ』ブチョンジを果たした。

「あー、たくつ。ちよい代えを用意すつから血継しとつ」

そつ言つてななこはブックサ言いながら代えの教卓を持つてくるために教室を出て行つた。そして明久はそれを見た後、今度は視線を瑞希に向ける。

「けほつ、けほつ」

教卓が壊れたせいで僅かに埃が舞い上がりてしまい、瑞希はそのせいで咳き込んでいた。

「……雄一」

「なんだ？」

「ちよつと話があるんだ。だけど」「じゅムリだからせ、ちよつと教室の外に」

「……わかつた。いいだろつ」

そんなやり取りの後、明久と雄一は教室の外へと出た。

「あの二人、どうしたんだるつ？」

なんとなくそれを見ていたつかさが疑問符を頭に浮かべる。

「さあねえ。何かたくさんでるんじゃないの？」

「泉さん。いくらなんでもそれは考えすぎじゃないでしょつか？」

「あなたはなんとなく言い、みゆきがやんわりとここにいない一人をフォローする。」の辺りに、みゆきの聖人君子ぶりが垣間見える。

「まあ、確かにね。それにしても、観察処分者ってどんな人かなと思つたけど、意外と話せるかもね？」

「もう言いながら」なたは明久の鞄の中から色々取り出しつて見ている。

「……ねえ、」なちゃん。廊下でも少し聞いたけど、観察処分者ってなんなの？」

「そういえばまだちゃんと説明はしてなかつたね。じゃあ、説明してしんぜよう」

## Tutorial 『観察処分者』

つかさ（以下「）「あの、これってなあに？」

こなた（以下「）「チュー・トリアルだね」

みゆき（以下「）「チュー・トリアルというのは、少数の生徒に教師が集中的に教える」と、あるいは家庭教師による一対一の教育のことを言います。もしくは、教育用の書籍や、ビデオなどの各種メディア入門部分のことを言いますね」

つ「えーと……」

こ「つまり、初めてのことに対するやり方を教えるつって事。ゲームで言う説明書見たいなものだよ」

つ「あー、そう言つことなんだね。でも、何で「こんな」とするの？」

こ「ちょっとメタなこと言つけど、この作品は「バカテス」と「らぎすた」のクロス作品じゃん？だから、中には「らぎすたは読

んだことあるけど、バカテスは無いなあ」なんて人がいるかもだからね」

み「ですから、」の場は私たちが「バカとテストと召喚獣」に出てくる設定などを説明するための場所ということです

つ「そりなんだあ」

こ「で、今日は「観察処分者」についてだね。というわけでみゆきさん。説明ヨロシ」

つ「ええ！？」こなちゃんが説明するんじゃないの…？」

こ「いやいや、こにはみゆきさんの出番だよ。まあ、作者の好みもあって、みゆきさんは結構優遇されるかもだけど、」の場はみゆきさんがやつてこそだよ。というわけでみゆきさん。改めてお願ひします」

み「はい。まず、「観察処分者」というのはここ、文翔学園のみで採用されている試みの一つです。具体的に、成績が悪く、学習意欲に欠け、更に素行不良の生徒が認定の基本対象になります。この観察処分者に認定されると、その生徒の召喚獣には以下の制約が加わります」

？召喚獣の物理干渉の付加

？疲れ・痛みなどのフィードバックによる感覚共有

み「そして、その召喚獣を使い教師の監視下のもと、奉仕作業を行います」

つ「奉仕作業？」

み「召喚獣は点数が一桁でもかなりのパワーを發揮します。そのパワーを使って、本来なら数人で行う力作業を行います」

こ「ただし、フィードバックの影響で相応の疲れが来るけどね」

み「そして、召喚獣がダメージを受ければその何割かが召喚者に行き渡ります」

」「だから、そう簡単には召喚出来ないんだよねえ」「えっと、それじゃあ本編に戻りますっ」「

## Lucky Star

しばらくすると、明久たちは教室に入ってきた。それとさほど間をおかずななこも代えの教卓を重たそうに持ちながら入ってくる。ちなみに、代えの教卓もボロだった。

「よしつ、せんじやあ自己紹介の続きをすんでっ。」

そななこが言い、再び自己紹介が始まる。  
そな中、つかさは明久にさつきなんで雄一と一緒に教室を出たのか聞いてみた。が、

「ああ、それはもうすぐ分かるよ」

「???」

明久の思わずぶりな言い様に、つかさは疑問符を浮かべるだけであつた。

「さてと、あとは坂本だけやな。坂本はこのクラスの代表やつたな。最後にビシッと頼むで」

「了解しました」

そう言つて雄一は教壇に上る。そして雄一に全員の視線が集まる。

「さて、俺は坂本雄一。このFクラスの代表だ。坂本でも代表でも

好きなように呼んでくれ。さて、突然だが皆に一つ聞きたい

『やつ』『やつ』『やつ』はぐるつと教室のあちらこちらを見ゆ。

「Fクラスの設備は、このようにボロの卓袱台に綿がほとんど入つてない座布団。そして腐った畳にひび割れの入つた、隙間風の吹きすさぶ窓に壁だ。対してAクラスはシステムデスクにリクライニングシート、個人エアコン、個人冷蔵庫、そればかりかドリンクサーバー。極め付けに教室は前面高級な絨毯に広さはFクラスの六倍とあてる。さて、ここで皆に聞こへ……」

「――」雄一は一瞬間を開ける。そして……

「不満は無いか？」

瞬間。

『――』『――』『――』『――』『――』『――』『――』

それこそ、教室はおろか――、旧校舎を揺るがしかねないほどの揺れがおかる。

「どうう？ 僕も代表として、一生徒として疑問と不満を抱いている」

『そうだそだ！』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ！？ こんなのは差別だつ！』

『全くだ！ 改善を要求する！』

『コッペパンを要求する！』

『おい誰だ！ 軍曹殿の台詞を言つたのは！？』

そしてあちらこちらから不満の声が上る。普通ならそれを分かつてこの学園に来たんだろうと言いたいが、このあまりな設備の差を見るとその言葉すら飲み込んでしまう。

どうでもいいことだが、もともとこのFクラスの教室設備はここまで酷くはなかつた。確かにボロではあつたが、少なくとも普通に学園生活を送るには充分な状態だつた。しかし、毎年毎年Fクラスに配属されるのは成績不振の生徒ばかり。当然中には観察処分者はいなくとも、不良と言える者もいた。そして、自分の努力不足を棚に上げ学園に対して文句を言うばかり。そしてこの状態に腐ったFクラス生徒は物を大切に扱わなくなり、次第にボロボロでも見方によつては年季が入つていていえるこの設備はボロボロになつていつた。腐つた畳に關しても、眞面目に掃除しなかつたことが積み重なり起つたことだ。要するに、腐る それを見てやる気をなくす 更に腐る。と言つた悪循環が起きていたのだ。

「さて、だからこそ俺はFクラス代表として提案する」

そう言つて雄一はFクラスの生徒を見回す。そして言つた。

「俺たちFクラスは、Aクラスに対して試験召喚戦争を仕掛けようと思う！！」

おまけ

吉井明久 召喚獣設定

ユニットクラス	Bad student
装備	頭なし
身体	改造学ラン(黒)
足	なし
武器	木刀(櫻の木製)
腕輪	???

## 戦いのための金（後書き）

はこうじゅもー。第二話書きました。今回からそれぞれの召喚獣のデータを乗せようかと思います。一番苦労するのは多分ゴーリックラスの名前だと思うので、この人にはこれっ！と言う方はどうぞ。募集しています。

## 脱兎が」とく

『勝てるわけがない』

それこそが、雄二の宣言に対するFクラスの面々の回答であり、反応だった。とはいえそれも仕方が無いと言える。AクラスとFクラスとでは、総合的な成績の優劣はもちろん格も違う。テストの点数も、正に桁が違うのだ。真剣且つ必死に勉強してからならこの宣言に対して分からなくもないが、今は新学期が始まつてまだ一日目なのだ。もちろん勉強などしてゐるわけがない。

「そんなことは無い。絶対に勝たせてみせる」

『何をバカな』

『できるわけが無いだろ』

『何の根拠があつて言つてるんだ』

『姫路さんがいれば何も入らない』

『高良さんの胸に顔を埋めたい』

『勝てるわけが無い』

『俺の妹がこんなに可愛いわけが無い』

『おい、ホントに誰ださつきから！？』

雄二の言葉に、様々な返答が帰つてくる。それも仕方が無いものだった。

「根拠ならあるさ。」のクラスにはAクラスに勝つための要素がそろつてゐる

『要素……だと？』

「ああ。それまず紹介してやる」

### 第三問 脱兎がごとく

「さて……おい康太。姫路のスカートの中を清々しさすら覚えるくらい堂々と覗いてないでこっちに来い」

「……！？（ブンブン…）」

「は、はわっ！？」

雄一の突然の言葉に瑞希の座る卓袱台の下にその身を屈め、正に言つとおりに瑞希のスカートの中にある聖域を見ようとしている小柄な男子が首をブンブン振り、その男子に気がついた瑞希が慌ててスカートを手で押さえた。

「さて、こいつは土屋康太。まあ、名前の方は聞き覚えの無いやつの方が多いだろ？だが、こいつこそがあの有名な寡黙なる性識者（ハツヅリーニ）だ」

そんな雄一の言葉に、クラス中がざわつき始める。

『バカなつ！ 奴がムツツリーーだと…？』

『奴がそうだというのか…？』

『だが見ろ、未だに頬についた畳の後を隠そうとしているが』

『ああ、ムツツリに恥じない行動だ』

そんな彼等の言葉に当のムツツリーーは頬を摩りながらブンブンと首を振る。なんとも器用なものである。ちなみに、ムツツリーーというあだ名は言つまでもなくムツツリスケベからきている。それゆえに男子からは羨望と尊敬を、女子からは軽蔑と侮蔑を集めている。

「試合戦争において情報は重要だ。そしてこいつはそういうことの収集力がある。だから、ムツツリーには情報収集の役割をなつてもうつ。さて、次は木下秀吉」

その言葉に全員の視線が秀吉に集まる。

「秀吉は演劇部のホープだ。そして、秀吉の特技が『声帯模写だ』」  
『『『『『一々』』』』

誰もが驚いた。なぜなら雄一の声が二つ重なったかのように聞こえたからだ。

『このとおり、大抵の声、音ならある程度再現可能だ。まあ、やるならやるである程度準備が必要だがな』

秀吉は雄一の声で説明する。それはある意味壯観であった。

「さてお次は、姫路瑞希、そして高良みゆきの二人だ。お前等もこの二人の成績に関しては知っているだろ?」  
「わ、わたしですか?」

「わたしですか?」

「そう、お前達二人はFクラスのワイルドカード、切り札だ。期待と同時にあてにもしている」

『「そうだあの二人がいるんだ』

『「そうだよ。この二人ならAクラスにだつて負けない』

『姫路さんと結婚したい』

雄一の説明にあちらこちらから様々な声が上る。

「そして当然、俺も全力を尽くす」

『坂本つてたしか昔神童つて呼ばれてなかつたか?』

『そなのか? ジャあFクラスになつたのはあの一人と同じで調子が悪かつたのか?』

『だとしたらAクラスレベルが一人もいるつてことか。これはもらつたな』

「そして、吉井明久もいる」

しん……

「つて、雄一! 何でここで僕名前を出すの! ? 必要ないよね! ?」

ただ一人、明久だけが声を上げる。

『だれだ吉井つて?』

『さあ、売れぬピン芸人か?』

『聞いたこと無いぞ?』

そんなクラスメイトの言葉に、雄一はニヤリと笑つて言つ。

「そな、知らないなら教えてやる。コイツ、吉井明久は観察処分者だ」

『なんだと、観察処分者! ?』

『まさか、奴が……』

そんな戦慄をするクラスの中で、スッと手が上る。

「あの……」

「なんだ、姫路?」

「観察処分者ってなんですか？」

「観察処分者っていうのは、普通の生徒には『えられない称号だ。成績が悪く、学習意欲の無い奴に『えられる」

「バカの代名詞とも言われてる」

「何の役にも立たない奴のことよ」

「……ザ」

雄一の言葉に秀吉、美波、ムツツローの辛辣としかいえない言葉が明久に突き刺さり……

「わあ～、す～いんですね？」

瑞希のトドメの一撃が与えられた。

「皆嫌いだ！」

そう言つて明久は教室を脱兎がごとく飛び出したのだった。

「！？ まずい、待て明久！」

そんな明久の行動に、雄一は慌てた表情になる。

「みんな、急いで明久を捕まえろ！ 急いでだ！」

「どうしたのじゃ雄一。いきなり」

「もし、明久がなんかの拍子に他のクラスと接触して、今回の試験の件を知られたら大変だ。下手すりや対策を立てられる。それに……」

「それに……」

「明久はDクラスに宣戦布告をさせるためのいけに……大使だからいてもらわないと困る」

「お主、最低じゃな……」

「まあとにかく。みんなで明久を探し出してくれ。あ、ちなみに姫路と高良は教室から出るなよ？お前らのことは最重要機密なんだからな。当然、探す奴は試験戦争の件を他のクラスの奴に言つなんや？」

そんな雄一の言葉に、全員が頷き教室から出て行つたのだった。

## 利用価値、存在意義（前書き）

さて、なんか鬱な感じのタイトルですが、そんなことはありませんので。

## 利用価値、存在意義

Fクラスの面々が明久を探し始めて十分近く。Fクラスの男子はそれぞれゾロゾロと適当に探し回っていた。適当なのは理由がある。まず、先ほど雄二がした明久の説明。アレを聞いて、明久が戦力として使えるのかと聞かれたら、間違いなくNOと答えるはずである。先ほどの説明で分かったことは、明久は観察処分者であること、フィードバックがあるからおいそれと召喚できないことだ。そして最後に言われた辛辣な言葉で、Fクラスの面々は、明久は完全な役立たず、もしくはスケープゴートという認識ができていた。

だからこそ、だれもそこまで真剣に明久を探そうとは思わないのである。役立たずを探しても、何のメリットも無いからだ。

だが、そんな彼を、真剣に探している人間がいた。

### 第五問 利用価値、存在意義

唯一真剣に探している人物。つかさはこなたと一緒に明久を探していた。

「いやー、それにしてもこいつして見ると結構広いねこの学園」

頭をポリポリと搔きながら、こなたは辺りを見る。が、どこにも明久の姿は無い。

「ど」「に行つちや たんだろ？」「吉井君……」

「……ねえ、つかさ」

「ほえ、なに」「こなむりやん？」

「なんですか、つかさは吉井君を探すの？ そんなに真剣」「え……？」

突然掛けられた質問に、つかさは疑問符を浮かべた。

「だつてさ、わっしきの様子を見ても吉井君はソ「まだ」なくちやうけないようには見えないでしょ？」

「そ、う、な、の、か、な、……。よくわからな、い、か、び、探、さ、な、き、や、つ、て、思、つ、て」

「ふーん。それじゃあ、い、じ、で、ち、よ、つ、と、分、か、れ、よ、う、か。私、は、ま、だ、こ、の、階、を、探、す、か、ら、さ、つか、さ、は、屋、上、を、探、し、し、よ」

「え、うん。わかった」

そう言つてこなたは階段の所でつかさと分かれ、つかさは屋上に続く階段を登つていつた。

「オノ……

少々重量感のある鉄製の扉を開け、つかさは屋上へと出た。春の風が、つかさのライトペープルの髪を微妙に波立てた。そんな、春の情景を感じさせる屋上の隅に……

「うう……ひどいやひどいや……眞して、寄つて集つて……（つ  
、）」

「うじうじと、地面に八の字を書きこじける明久はいた。

「あの、吉井君……」

「……！　柊さん」

「その、大丈夫……？」

何氣なく、そう言つてゐるつかさ。が……

「柊さん……人間でね？　ちょっと高にとこから落ちただけで死  
ねるんだよ？」

そう言つ明久の視線は、金網の向こう側を向いていた。

「ちょ、ダメ！　ダメだよ吉井君……」

あまりな発言に、つかさはギョッとなる。

「だつて……さ。確かに僕はバカだけど、だからってあそこまで言  
わなくともつて思つよ……。あそこまで、差別みたいなことしなく  
てもさ……」

そう言つて再びうなだれる明久。それを見て、つかさは、気がついた。なぜ、ここまで彼を必死に探したのかを。

そう、似ているのだ。昔の自分と、幼かつた頃の自分と……。

「吉井君。似てるね、私と……」

「え……？」

そう言しながら、つかさは屋上の金網の向こうを見る

「私ね、昔……小学生のころ、吉井君と同じ事を感じたことがあつたんだ。私のお姉ちゃん、何でもできたんだ。勉強も、スポーツも。だけどね？ 私は何もできなかつた。勉強もできないし、スポーツだつて苦手。いつも、クラスの男子にバカにされてて、いつも泣いてた」

「……」

「それでね？ そんな時、お母さんが教えてくれたんだ。『まずは、自分ができる』ことは何があるか探してみたら』って。それから私、考えて、見つけたんだ。自分ができること、これだけは自慢できること。えと、だからさ、探してみようよ、一緒に。吉井君ができること、これだけは自慢できるって事」

そう言つて、つかさは明久に手を差し伸べた。

「探せる……かな？」

「私も協力するよ。だから、探してみよう？」

「……うん」

そう言つて、明久はその手をとつた。

明久の逃走から一十分。ようやく明久は教室から戻ってきた。そんな明久に対して。

「ようやく戻ってきたな、生に……明久」

「雄一。今絶対に生贊つて言おうとしたよね？」

「気のせいだ、スケープゴート」

「イツとは一度しつかりと話しあうべきだと思つた瞬間であった。

「まあ、それはともかく。明久、Dクラスに對して宣戦布告の大天使をして欲しい」

「何で僕なの？」

「これは、お前だから、いや、お前しかできないことなんだ」

「へー、そうなんだ」

「ああ、そうなんだ」

雄一の説明に、明久はわざとらしく頷く。

「だけどさ、僕は役に立たないんだよね？　特に島田さんは何の役にも立たないって言ってたし」

「いや、それは……」

「そんな役立たずじや、そんな大役できないからさ、他の人にやつてもらいたいなよ」

そう言つて、明久は自分の席に戻つた。

「頑張るうね、アツ君」

「うん。つかさ」

そんな、親しい二人のやり取りを見て、こなたは「フラグを立てたね」と呟いており、みゆきは疑問符を浮かべていたのだった。

## 利用価値、存在意義（後書き）

つかさとのフラグが立ちまくらですね……（^\_^;）

## 作戦会議、そして食事事情

結局、Dクラスへの宣戦布告の大天使は須川を始めとした数人が行くこととなつた。ソコまでやるなら自分がすればいいのにと、明久は雄一を見るが、当の本人はどこ吹く風である。須川たちが戻ってきて、僅かにボロボロであることに関しても、我関せずであった。

### 第六問 作戦会議、そして食事事情

さて、場所は再び屋上になる。そこに、明久、雄一、秀吉、ムツツリーニ、つかさ、みゆき、こなた、瑞希はいた。理由はミーティングをするためである。

「それで雄一。結局、Dクラスとはいつやるの？」  
「ん？ ああ、午後に開戦予定だ」

明久の間に、雄一はそう答える。流石に正確な時間は伝えられなかつたようである。

「それにしても、なんでDクラスなの？ 普通に考えたらEクラスからなんじやない？」  
「まあ、普通に考えればそうなんだが……。明久、今お前の周りに

どんな奴がいる?」

「えーと……」

そう言われ、明久は周囲を見渡す。

「ゴリラが一匹と美少女が四人。ムツツリが一人とロリが一人いるね?」

「誰が美少女だと?」

「……(ポツ)」

「ちょ!? まづい、僕だけじゃ突っ込みきれない!」

ちなみに、聰い読者諸君なら言つまでも無いが、あえて表記しておぐ。

ゴリラ 雄一

美少女 つかさ・みゆき・瑞希・秀吉

ムツツリ ムツツリーニ

ロリ こなた

「ま、まあともかく。今の俺達には姫路や高良といった戦力がある。いくら上位クラスとはいえ、Eクラスなら戦つまでも無い」

「ところことは、Dクラスは確定ではないのかの?」

「まあ、絶対とは言えない」

秀吉の言葉に、雄一は頷いて応える。

「Dクラスは百点台がそれなりにいる。百点台ばかりか、五十点台すら怪しいウチじや難しいからな」

「まあ、強いと無敵はイコールじやないからね」

「あなたもそう相槌を打つ。

「それに、Aクラス攻略のためにはDクラスを倒す必要がある。勝てる勝てないの問題じゃない」「まあ、どちらにせよ開戦は午後からなんだし、まずはお昼だね」「そうなるな。明久、今日はまともな飯を食えよ?」「そう言つなら、パンぐらにおじつてくれる嬉しいんだけじ……」「……? 吉井君つて、お昼食べてないんですか?」

瑞希の質問に、明久はほんの少し視線を逸らした。

「……いや、食べてるよ?」  
「アレを食べてると言えるか? お前の主食、塩と水だろ?」「失礼な! ちゃんと砂糖だつて食べてるよ……」「……砂糖は食べるとは言わない」「舐めると言う方が正しいの?……」「し、仕送りが少ないんだよ……」

そのあまりな明久の食事事情を田の当たりにしたつかさ達であった。

「アツ君。ちゃんと飯は食べないとダメだよ」「確かに、水と塩分と糖分があれば人間はある程度は大丈夫ですが……」「いるもんだね。漫画とかに出てきそうな食事事情の人って」「それにもしても、アツ君つて仕送りで生活してるの? お父さんとお母さんは?」

ふと思つた疑問をつかさは口にする。

「いや、ただ仕事の関係で海外に行つててさ。そのせいなんだけな  
「ま、そのせいでもともに生活できてねえんだけどな」

「つるむせこだわ雄一」

そう言つて、一人に、瑞希はほんの少しだけ前に出て……

「あ、あの吉井君。それでしたら、私が作つてしましょうか？ そ  
の、お昼ご飯」

「え？」

「うん。ソレはいい考えかもね？ だつたら、皆で作つてこようよ」

「はい、それはいいかもしれませんね？」

「あなたに考へにみゆきも同調する。

「えと……本当にいいの？」

「はいっ大丈夫です」

明久の間に、瑞希は快諾したのだった。

「よしつ、そんじやあ飯の話はこれまでにすつか。いいか、俺達は  
……最強だ。俺達なら、絶対Aクラスに勝てる。見せつけやうつ  
じやないか！」

そんな雄一の言葉に、その場の全員が頷いた。

それからは、全員で簡単な作戦を立てたりなどして解散となつた。  
ちなみに、明久とつかさはこなたに互いを名前で呼び合つてゐるこ  
とを追求されていたのだった。

……それから。

「それはそうと、柊」

「なに、坂本君？」

「今回の試召戦争。お前の姉には俺達とは関わってないって言えよ。  
もし、聞かれたならな」

「え？ どうして？」

「……アイツのことだ。もしあ前が俺達に何かしら関わっていると  
知つたら、絶対にうるさくなるからな」

こんな会話が、誰にも知られない内にあつたのだった。

## 現実はやつがくない

その日の午後。新学期初日だというのにFクラスとロクラスの試験召喚戦争は開始された。戦況は、はつきり言えばFクラスは劣勢だった。もともとFクラスは基本的に勉強ができない、しない、したくない、の連中が集まっているのである。むしろ、みゆきや瑞希のよう、事情持ちとはいえ秀才な人間がFクラスなんかにいるのがおかしいのである。

そして、件の二人は切り札として前戦に出でてはいない。雄一の強引なアジで最初は高かつた士気も、一人一人と戦死していくうちに段々と下がっていく。あまり良い状況とは言えなかつた。

そんな良くない状況の前線で、つかさはこなたと二人で戦つていた。片やエプロンにフライパンと盾代わりの鍋蓋を持ったつかさの召喚獣。片や、紅い鎧に剣と、かなりいい装備のこなたの召喚獣。一つの召喚獣は、次々に掛かってくる召喚獣をザシュウッ！と切り伏せ、時にはフライパンのスパコーンッ！ という音と共に吹っ飛ばす。

どうでも良いが、片方はともかく、片方は攻撃がヒットした、なんともマヌケな音のせいでの微妙に緊張感が欠けていた。

この前線が完全に絶望状態になつていい要因の一つがこの二人だつた。ヤマさえ当たればAクラス並みの高得点をたたき出した。点は低くとも、こなたの背中を守るようにフライパンをブンブン振り回すつかさ。そして……

「なん……とあつー」

そう言いながら、相手の召喚獣の攻撃を往なし、顔面に攻撃を喰わえ、相手を戦死させる明久の召喚獣。

表示されている点数ははつきり言って低い。だが、明久にとってはそれで充分なのだ。観察処分者というレッテル。ファイードバックがついてくるマイナス要素にしか見えないこのレッテルにも、受けられる恩恵がある。

それは、高い操作技術である。観察処分者の仕事は大抵が召喚獣を使った力仕事。人間はほぼ無自覚で物事の効率を良くすることがある。明久の場合は、より無駄の無い、高い操作技術を得ることだつた。操作に慣れれば当然無駄が減る。そうすれば、無駄に費やす体力の消耗を抑えることができる。そういうことだった。その結果、明久は、己の点数の2~3倍（運がよければ4倍）の相手とも普通に渡り合える。相手によつては圧倒できる。

「（僕だつてやれる。この力は、誇れるものだ！）」

屋上でのつかさとの会話。あの会話で、明久の中できまざまなものが吹つ切れた。

認めよう。自分はバカだ、点数は低い。最底辺のクラスでも、更に下の方だ。だけど、自分にはこの操作技術ちからがある。これだけは、誰にも負けない。

「（ありがとうございます、つかさ）」

心の中で、明久はそうお礼を言つた。自分の中の可能性を見つける切つ掛けになつた彼女に。

第七問 現実はそう甘くない

「さあ、どんどん来い！！」

そんな明久の啖呵に、その場にいたDクラスの生徒が明久を標的にし始めた。

「舐めんな、Fクラス風情が！」

Dクラス 出木慶 物理 98点

そう叫ぶDクラス生徒の一人が召喚獣を召喚。ブレイドアックスを振るつて明久の召喚獣を攻撃する。明久の召喚獣はそれを避け、相手のブレイドアックスを持つ腕を足で蹴飛ばし、相手の召喚獣のバランスを崩したあと、一気に咽元に木刀を思いつき突き込んだ。

ドガツ！

木刀とはいえ、咽元に突きこまれれば只ではすまない。咽に与えられたダメージに、吹っ飛ばされ、後頭部を強打したことにより相手の召喚獣は戦死した。

「戦死者はあ、補習うううううう——！」

そして、どこからか現れた鉄人西村により、首根っこつかまれて

運行されていった。

「ちょっと待つてくれ！」

「往生際が悪いぞ！ さあ、補習だ！」

「いやだ！ 頼む、あんな地獄耐えられない！」

「地獄？ 違う。あれは立派な教育だ。終わつた頃には趣味は勉強。尊敬する人は一富金次郎という立派な生徒に仕立て上げてやろう」「いいいい————やあああ————！」

そして、断末魔が戦場に響いた。

『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

その瞬間のみ、戦場から戦う音が完全に消えた。

「あ……、せ、先生！ Dクラス山本が行きます！ 試験召喚！」

我に返つたDクラスの生徒が召喚獣を召喚する。そして、明久の召喚獣に攻撃を仕掛けた。

さて、本作でも、いや、この作者の書くバカテス小説のお決まりになりつつある事が起きていた。

「行きますわあー、お姉さま！…」

「くうつー！」

島田美波と清水美春。この一人が廊下の外れで戦っていた。

もともと、明久は美波を前線に出ていた。だが、劣勢になりつつある戦況を何とか支えるために一手に分かれたのである。そして、美波は色々な意味で因縁のある清水美春に見つかり今に至る。一人の戦いははつきり言って美波が完全に不利であった。操作技術は完全に互角。そうなれば後は点数の差だった。そして肝心の点数は

Fクラス 島田美波 化学 53点

VS

Dクラス 清水美春 化学 94点

40点もの差があった。明久なりいざ知らず、美波にとつてはどうにもならない点差だった。事実、明らかに力負けしており、今にも体勢を崩されそうである。

「お姉さまに捨てられて以来、美春は一日千秋の想いで待つていましたわ！」

「ちょっと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！ それにウチは男が好きなの！」

「嘘ですっ！ お姉さまも美春の事を愛しているはずです！…」

「...やありやかわがわのひ」

強気で言い返すが、それだけでどうにかなる物でもなく。そのまま美波の召喚獣は体勢を崩され、倒れこむ。さらに、手に持つていたサーベルもカラカラと音を立てて離れたところに転がった。

「わあ、お姉さま。」今までにしましがいへ。

「補習室？」  
違いますわよ？」

卷之三

「ちょっと！ どこへ連れて行くつもり！？」

「お姉さま……。今なら保健室のベッドは空いてますわ（ハハ）」

「うう！  
うよ、吉井！  
暖簾を

「そこの！ ふつ！ ！」  
「ちいっ！ フクラスのくせして……。」

明久は目の前の相手に夢中。こなたとつかさを始めとする他のFクラス生徒も自分の目の前の敵に夢中であつた。

その後、Dクラスとの試験召喚戦争中、島田美波と清水美春を見た者はいない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9522w/>

---

バカとテストとラッキー スター

2011年11月19日19時35分発行